第3項 ノアの箱舟

《 聖書全体の中の本項の位置 》

人間の罪に対して何も裁きはないのでしょうか。
悪いことをする人は、そのまま野放しなのでしょうか。
神はかならず悪い人を裁かれます。それを教えているのが
「ノアの洪水」とか「ノアの箱舟」といわれる創世記第 6 章から第 10 章までの物語です。
聖書の中では、しばしば「裁き」が取り上げられます。
もっとも有名なのは、新約聖書の最後の「ヨハネの黙示録」に書いてある
終末のときの裁きです。聖書は人間の救いを教えている書ですが、
救いの裏側にある裁きを語らないわけにはいかないのです。
神の裁きが「ノアの洪水」（ノアの箱舟）の物語のテーマです。

ノアの箱舟と洪水

NOTES

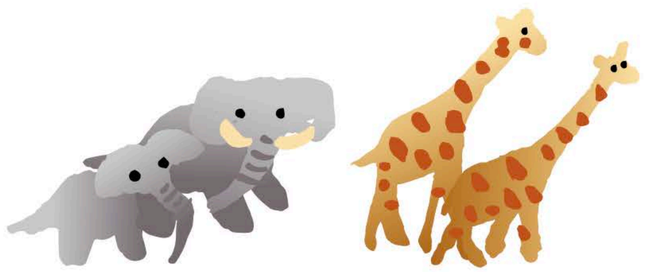
アダムの犯した罪は、すぐにその息子に受け継がれてしまいました。アダムの子である兄カインが弟のアベルを殺してしまいました。さらに子孫へと罪は遺伝されていきます。

小さな罪も大きな罪も入り混じって、地上は人間の罪のるつぼのようになりました。まだ貨幣はありませんでしたから、お金を欲しいとは思いませんでしたが、他の人が持っている物をどうしても欲しくなり、横取りする人々がたくさん現れました。他の人を自分の思い通りに従わせたいと思う権力欲の強い人は、暴力を用いました。腕力の強い男が、自分の欲望のまま人々を服従させました。被害を受けたのはおもに女性でした。

乱れた世の中で生まれてきた子供たちが大人になり、ますます悪い男たちが出てきました。なかには体が 2 メートルを超える大男で、わがままで、手の付けようがないほどの荒くれ者がたくさん現れてきました。誰かがその男を殺せば、さらに別の悪い男が現れ、復讐が復讐を呼びました。

神は人間を造ったことを後悔しました。

「わたしは人を創造したが、
これを地上からぬぐい去ろう。
人だけでなく、
家畜も這うものも空の鳥も。
わたしはこれらを造ったことを後悔する。」
（創世記 6:7）



しかし、神は地上にただ一人、無垢の人ノアのいることを知っておられました。彼とその妻、さらに彼の三人の息子夫婦、合計八名だけは生き延びさせようと考えました。

神は言われました。

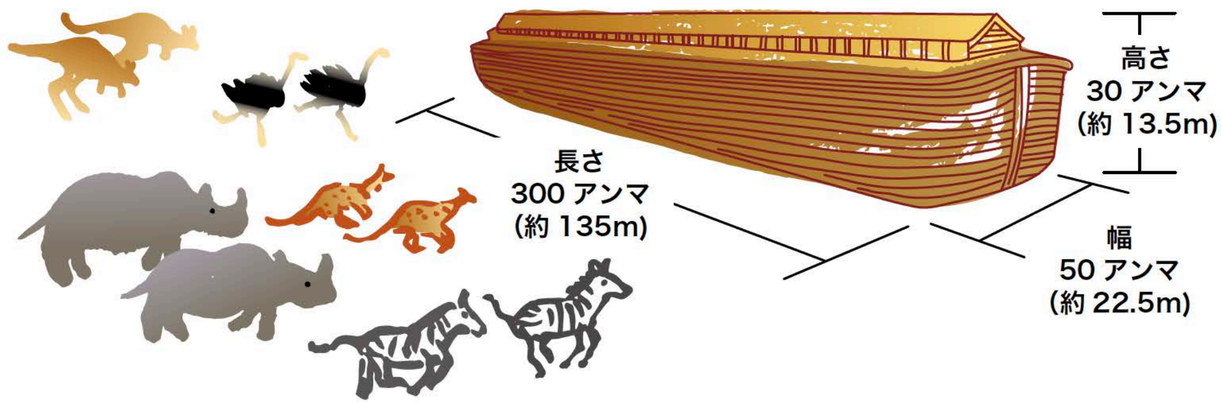
「ノアよ、杉の木で箱舟を作りなさい。船の長さは 300 アンマ（約 135 メートル、1 アンマは肘から指先まで約 45 ｃｍ）、幅は 50 アンマ（約 22.5 メートル）、高さは 30 アンマ（約 13.5 メートル）でそれを三階建てに作りなさい。そこにすべての動物と鳥のおすとめすを入れなさい。あなたの家族も全員入りなさい。動物と鳥とあなたがたのために、十分な食料も運び込みなさい。わたしは四十日四十夜雨を降らせます。全地は洪水によって滅びます。しかし、お前とお前の家族は生き延びなさい。」

ノアは箱舟を作りました。作り終えたとき、ポツリポツリと雨が降り始め、やがてざあざあと本降りになりました。七日間も降り続けるものですから、すべての動物のおすとめすが箱舟に集まってきました。鳥たちも箱舟に取り付けられている明かり窓から入ってきました。

雨はその後四十日四十夜ざあざあと降り続けました。箱舟は地面から高く離れ、ただよいました。水深はもっとも浅い所で 15 アンマ（約 6.8 メートル）にも達しました。こうしてすべての人と動物が滅びました。水はなかなか引かず、五か月もの間全地は水でおおわれていました。

「どすん。ぎー」と音がして、箱舟はアララト山にとまりました。さらに三か月たつとまわりの山々の頂が現れました。さらに四十日たってから、ノアは窓からカラスを放ちました。しかし、カラスは止まる所がなく、もどってきました。つぎに鳩を放ちました。やはりもどってきました。七日後、再び鳩を放ちました。喜ばしいことに夕方になって鳩はオリーブの葉をくわえてもどってきました。さらに七日たって、ノアは鳩を放ちました。もうもどってきませんでした。

NOTES



それから五十数日後に、ノアは箱舟の覆いを取り外し、窓を開け放ち、戸を開け、すべての生き物に、

「さあ、出なさい。産めよ、増えよ」と言いました。

ノアも外に出て、石を組み、火をくべて、神によって定められた清い家畜と清い鳥の中から選んだものを焼きました。**良いにおいと煙が天空に上って行き、いつの間にか消えました。主がその香りと煙を、喜んで受け入れてくださったことを感じました。**ノアにはどこからともなく神の声が聞こえて来ました。

「人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。
わたしは、もう二度と大地をのろわない。
産めよ、増えよ、地に満ちよ。
すべてはお前たちの手にゆだねられた。
世の終わりが来るまで、季節はめぐり、
種を蒔けば、刈り入れができる。
けっして人を殺してはならない。
お前たちは、わたしの姿に似せて造られたものなのだから。
見よ、わたしは虹をかける。
それが人の生き延びるしるしだ。」

ノアとその息子たち、セム、ハム、ヤフェトから、新たに人類の子孫が増えていきました。セムの子孫としてアブラハムが生まれてきます。

ノアの箱舟が教えるもの

この恐ろしい人類滅亡とノアの救出物語は、いったい何を教えようとしているのでしょうか。聖書はけっして込み入ったことを教えようとはしません。神はいつも分かりやすく明解なことを教えます。神は**悪い者を裁き、心の清い者を救います。**

神の裁きは戸口に迫っています。人はけっして神を侮ってはなりません。神は人を必ず裁きます。悪を離れ、善に生きなさい。人はノアの子孫なのだから、ノアのような人になりなさい。

では、どの程度の悪までは許されるのでしょうか。善に生きるというようなことが、はたして本当にできるのでしょうか。「私のような罪深い者は、結局、最後には、神に裁かれて地獄に落とされるのではないか。」 ノアの箱舟の物語は、私たちにいろいろなことを考えさせます。「私は救われるでしょうか」という問いに、人間は誰も答えることはできません。救いと裁きは、ただ神の手の中にあります。人はただ神による救いを信じて生きて行く以外にありません。

聖書が教えていることは、イエス・キリストの十字架の犠牲によって、私たちの罪が赦されたということ、しかし、神の裁きは必ずあるということです。矛盾するような、この二つの教えは、いつまでも続く二本の線路のように、聖書の中に一貫して流れています。

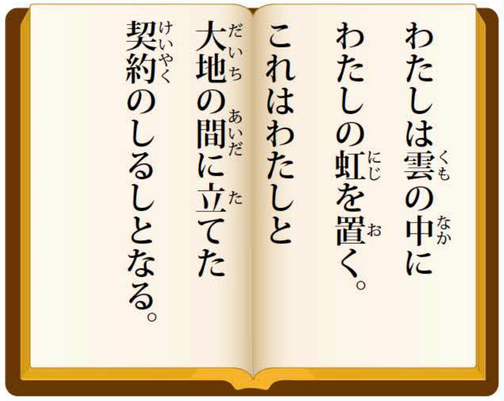
NOTES

有名な聖書の句

有名な聖書の句

「わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。」（創世記 9:13）

明るい空と静かな大地の間に立った虹を見て、ノアは生きていることのすばらしさを感じたのではないでしょうか。虹はうつくしい自然現象です。**虹は神と人間の平和な関係の象徴です。**あなたも今度虹を見たら、ノアの箱舟を思い出してください。



創世記 9 章 13 節

難しい語句の説明

「焼き尽くすささげ物」（創世記 8:20）

旧約聖書の中には、羊や牛を焼き尽くして、神にささげるという儀式がよく出てきます。

（1）自分の代わりに動物を完全に焼き尽くして、自分を神の目的のために完全にささげることを表します。

（2）煙と香りが天空に消えることは、神が自分を受け入れてくださったことを表します。

ノアが箱舟から出て最初にしたことはこの儀式でした。聖書の中に出てくる「祭壇」というのは動物を焼く所です。わかりやすくたとえると、それはちょうどバーベキューの台のようなものです。くだものや野菜をささげる日本式の祭壇ではありません。

おもしろポイント

メソポタミア民話

「『ノアの箱舟物語』はメソポタミア文明の古い物語の写しではないのか」という話を聞いたことがありませんか。はい、聞いたことがありますね。バビロニヤに似たような物語がありました。それを今から 150 年ほど前、1872 年に G. スミスという人が「ギルガメス叙事詩」（紀元前４千年ころの民話）の第 11 章の中にみつけました。筆者はそれを読んでみました。本当によく似ています。ほかの国の民話の中にも似たような物語があるそうですよ。どちらが「写し」なのでしょうか。なにしろすべて古い、古い物語ですからね。どれが一番古いかって？　もちろんノアさんが一番古いのではないですか。わたしはやはり「ノアの箱舟」は「ノアの箱舟」独自のものだと思いますよ。

トルコ共和国にあるアララト山（5137m）に行って、今も箱舟の断片を探している人がいると聞いたことがあります。人工衛星画像で箱舟を見つけたという話も聞きましたが・・・。興味が尽きないですね。

アメリカに「ノアの箱舟」の実物大の建造物が、一般公開されているそうです。それはもちろん「人類の裁きと救いの希望」を教育する展示です。日本のテレビ報道では、そのような教育的なことはほとんど語られず、興味本位に報じられていました。